

2024 年度

愛宕山古墳 発掘調査の成果

2025 年 3 月 31 日

大阪大学考古学研究室

所在地：兵庫県三木市別所町下石野

調査主体：大阪大学考古学研究室

協力：三木市教育委員会・市史編さん室

調査期間：2025 年 2 月 28 日～3 月 19 日



はじめに

大阪大学考古学研究室では、三木市教育委員会・市史編さん室の協力のもと、別所町下石野所在の愛宕山古墳（下石野 5 号墳）の発掘調査を実施しています。愛宕山古墳は、美嚢川と加古川とが交わる、交通の要衝に築かれた前方後円墳です。愛宕山古墳が築かれた古墳時代（3 世紀中ごろ～6 世紀）には、全国各地で古墳が築かれ、その総数は大小含め 16 万基以上とされています。その中でも愛宕山古墳のような大規模な前方後円墳は、当時の政治の中心である「ヤマト政権」との深いつながりを示すものと考えられています（図 1）。

一方で愛宕山古墳では過去に墳丘部分を対象とした発掘調査はなされておらず、また築造時期の手がかりとなる埴輪資料もわずかしが得られていませんでした。そこで大阪大学考古学研究室では 2022 年度より、墳丘の構造や古墳が造られた時期の解明を目的として発掘調査を開始しました。今回は 3 か年の計画のうち 3 年目にあたり、後円部の裾や構造を明らかにする目的で、主軸トレンチと東トレンチの 2 か所を設定しました。

発掘調査の成果

主軸トレンチの成果 墳丘主軸ライン上での墳丘裾や段築構造の把握を目的として調査区を設定しました。

これまでの調査で確認していた石列の上方で、墳丘 2 段目斜面とみられる緩やかな斜面が検出され、下半部では盛土層に突き刺すように配された葺石が認められました。これに



図 1 現在の愛宕山古墳
（上：前方部北西隅より、下：後円部南側より）



図2 各トレンチの成果

より、昨年度までに検出された石列は、2段目斜面に葺かれた葺石の基底をなすものであった可能性が出てきました。一方で、石列の外側では、テラス面（墳丘斜面の中途に設けられる平坦面）は明確には整形されず、墳丘下方に向かって緩やかに地山が傾斜していく様子が確認されます。墳丘下半では地山の傾斜を利用しつつ、斜面中途に石列を配することで疑似的に段築成を作出していた可能性も想定されます。

トレンチの南側では、昨年度に検出した墳丘裾の追究を目的として、幅1mの拡張を行い、昨年度の墳丘裾ラインの延長で、地山層の傾斜の変換点を確認しました。

東トレンチの成果 後円部径および墳丘構造の解明を目的として、現地地形が舌状に張り出している箇所^{かぐらんこう}に東西7.0m、南北1.5mの調査区を設けました。

後世の攪乱孔^{かくらんこう}や流土を掘り下げると、調査区西半において、西から東にむかって傾斜する黄灰色の盛土層を検出しました。この盛土による斜面の下半ではこぶし大の礫が密に配されており、墳丘斜面上に葺かれた葺石であると考えられます。

西から東にむかって傾斜する墳丘斜面は、調査区西端から2.9mの箇所で傾斜変換点をも

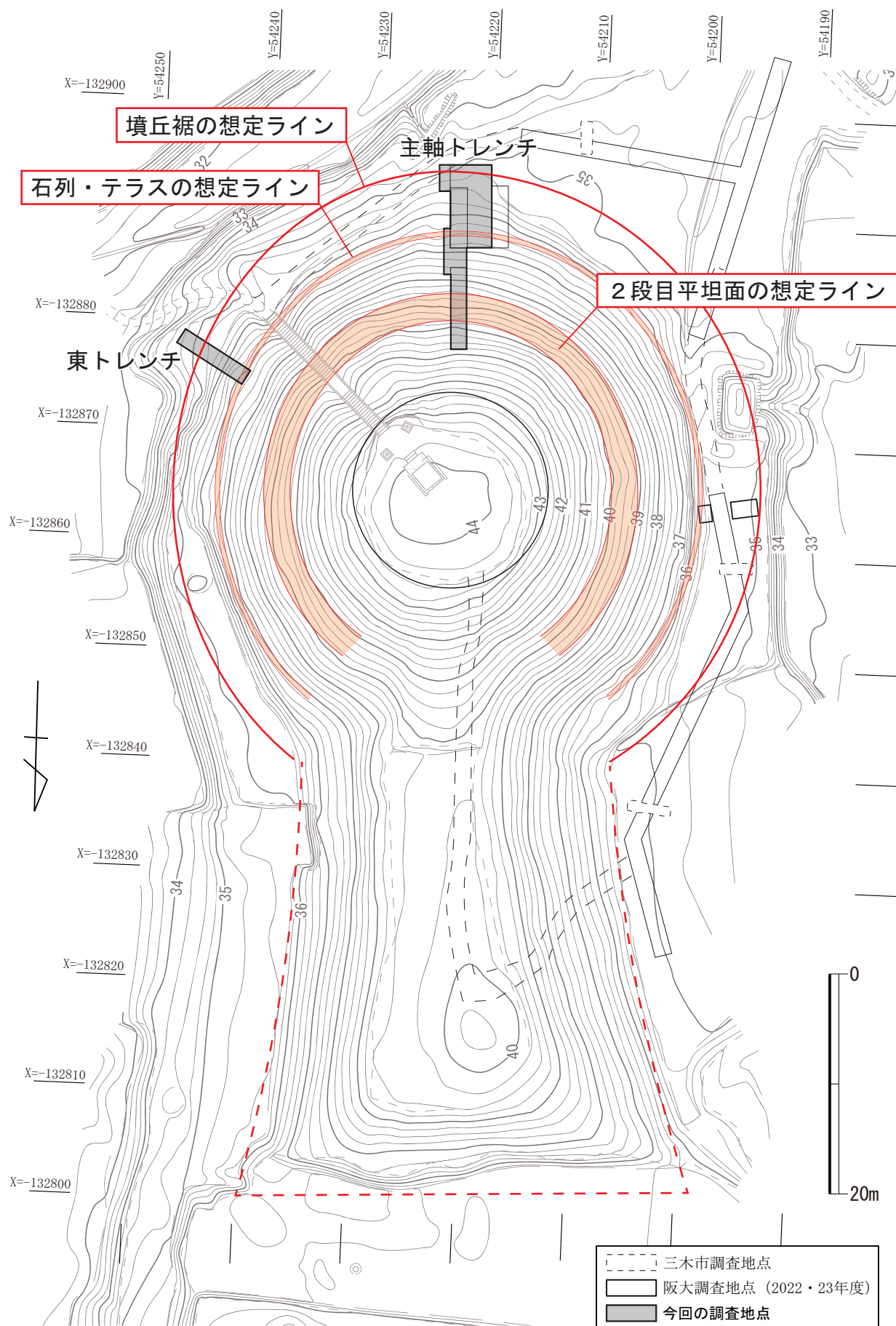


図3 愛宕山古墳 調査区配置と墳丘復元図
(大阪市立大学岸本直文研究室作成の図に補筆)

ち、以東では地山とみられる黄灰色粘質土に切り換わります。この傾斜変換点が後円部東側の墳丘裾とみられ、主軸上の後円部墳丘裾を基準とした復元ラインに比べて3mほど内側に入ります。南北方向に伸びる尾根に造営される愛宕山古墳の後円部は、南北方向が直径57m程度と長く、東西方向が直径54m程度と、やや短い不整な円形を呈していたことがわかりました。

出土遺物 今回の調査では140点をこえる埴輪、土器、陶磁器、瓦、古銭が出土しました。その中でも、古墳に伴う遺物としては埴輪類が挙げられます。埴輪では円筒埴輪の体部片が多くを占め、突帯付近に連続した刻み目を施すという特徴的な手法が確認されます。同様の資料は過去2年間の調査でも得られており、この独特な手法が愛宕山古墳の埴輪全体に共通することがわかりました。

また、円筒埴輪の上部に壺を載せた形態を模した朝顔形埴輪、あるいは壺形土器とみられる破片も新たに得ることができました。これらにも同様に刻み目が付されており、とりわけ「羽状文」と呼称される、連続する「く」の字状の文様を施す個体が存在する点は特筆されます。同様の文様は山陰地域で盛行するものであり、当古墳の埴輪に山陰地域からの一定程度の影響を読み取ることも可能です。埴輪の内外面調整やスカシ孔形状・配置などから古墳時代前期中ごろ（4世紀前半）以前に位置づけられます。

おわりに

今回の調査では、①後円部主軸上では石列を境として上段には葺石が施されていたこと、②後円部東側において墳丘裾が判明し、後円部が地形に制約される形で南北方向に長い不整円形を呈していたこと、③後円部東側でも葺石が確認されるなど、墳丘斜面では各所に葺石が葺かれていたこと、がわかりました。

また、主軸上、東側の双方を調査したことで、両者での墳丘構築方法の違いも明らかになりました。具体的には、主軸上では墳丘1段目が地山整形で、地山に含まれる礫を葺石と見立てていた可能性がある一方、東側では墳丘1段目から盛土を行い、葺石も施工されている様子が確認されました。加古川流域における最古級の大型前方後円墳の築造方法が判明したことは、当地域の古墳時代像を検討するうえでも大きな意義をもつといえるでしょう。

最後に、今回の調査において多大なるご協力をいただいた三木市教育委員会、市史編さん室をはじめ、別所ふるさと交流館のみなさま、そして地元である下石野のみなさまに、改めてあつく御礼申し上げます。

今回の調査は、科学研究費補助金によるプロジェクト「初期ヤマト政権の地域統合原理の解明と比較考古学的手法によるその人類史的評価」ならびに『新・三木市史』考古資料編刊行に向けての調査プロジェクトに基づくものです。

上記内容は現時点での暫定的な成果に基づくものであり、今後の整理作業によって変更が生じる可能性もあります。



図4 出土した埴輪片
(朝顔形埴輪あるいは壺など)

2024年度 愛宕山古墳発掘調査の成果

2025年3月31日
編集・発行：大阪大学考古学研究室